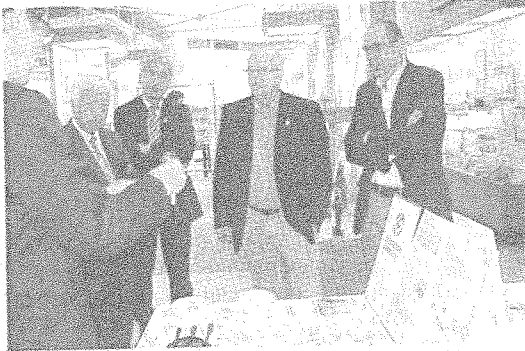


建設ゴーサイン「待つ」

工業技術セなど視察

ILC関係の 地元自治体と懇談も ドイツ研究者

国際リニアコライダー(ILC)の技術開発などに取り組むドイツの素粒子物理研究所の研究者2人が、ILC建設候補地の本県を訪れている。DESY(ドイツ電子シンクロトロン)所属のクラウス・ジンラム博士とトーマス・シューナー・サデニウス博士は12日、盛岡市北飯岡の工業技術センターや北上市などの加速器関連企業を視察。両博士は取材に応じ「できるだけ早く日本から(建設の)ゴーサインを待っている」と、具体化に向けて期待感を表明した。



工業技術センターで説明に耳を傾けるクラウス(中央)、トーマス両博士(右)

県政策地域部科学I 県を何度か訪れてILC推進室によると、今回来日に併い訪問を申し出、県が受け入れた。視察にはKEK(高エネルギー加速器)

器研究機構) 名誉教授の吉岡正和東北大・岩手大客員教授らも同行した。工業技術センターでは、南部鉄器や日本酒の醸造技術、3次元プリンター技術などが紹介された。2人はILCに直接関係しないと思われる技術にも通訳を介して熱心に質問していた。3次元プリンター関係の金属粉末積層造形装置に興味を示していた。

センターではILCに関して、加速器の超電導加速空洞を研磨する装置のコスト削減につながる技術を確立させている。県内企業の加速器関連産業の参入も期待される。拡大が期待される。県やセンターとの懇談で、トーマス博士は「センターの取り組みの幅広さが印象に残った。中小企業のサポートは称賛する。ドイツのモデルにもなる」と評価。その上で「ILC研究を進める中で良い拠点になるのではないかと。ワンストップで情報がデータベース化され、地域企業に提供できる場所が必要だ」と主張した。

もILCに詳しい」と印象を語った。その上で「できるだけ早く日本からゴーサインが出るよう願う。実現したら協力できることがある」と述べた。トーマス博士も「ゴーサインが出ることはわれわれにとっても同じ目標。そうすれば具体的に動き出せる」と期待を込めた。

同行した県の佐々木淳理専兼科学ILC推進室長は「2人は今回初めて触れる技術も多かったと思う。本県がこうした技術を持つこと、関連産業へのポテンシャルを感じてもらえればと考え、視察先に選んだ」と語った。盛岡市内のホテルでは、建設候補地北上市、イトのある一関市、奥州市、研究者らの受け入れ先にもなる盛岡市、県ILC推進協議会関係者も出席して意見交換が行われた。クラウス博士は「欧州の加速器関係者は日本でも実現に向けた準備などの動きを分かっている。もつと海外向けに幅広い情報発信が必要だ」と説いた。